卒業生の皆さんの作品集出版を祝って

千葉大学工学部工業意匠学科を卒業し、様々な領域に散り、活躍している多くの皆さんの作品集が今回初めて出版されますが、喜ばしい限りです。作品集が今後何回出るかわかりませんが、いずれにしろ作品集ができれば、卒業生の皆さんの個人名が浮き上がってきます。私が工業意匠学科で働き始めたのは20数年前のことになります。その間に卒業生として送り出した人は数多いのですが、その人達の卒業後の作品を知っている場合は、極めて少数なのです。デザイン活動では無名性が尊ばれるとしても、個人がかかわっていることは事実ですし、それに、また作品に企業の名が冠せられるのが通例であるとしても、それはあまりにも花が無さ過ぎると私は思います。

もう10年も前の経験ですが、こんなことがありました。ある公団住宅団地の前を偶然通り、その団地住宅の色彩処理の冒険的な有り様に感動した私は、先ずは実現例として私の記録にのせるべく多くの写真をとり、それから作者名を知ろうと様々な方面に電話で問い合わせをしました。やっと探しあてたと思われる制作者側の一人と目される人物の、私の興味に対する冷淡さと無感動に驚かされました。こんなことではデザインの歴史的な持続性なんてものはあり得ないと一人嘆いたものです。

作品集ができることで、記録が生きる雰囲気がかもし出されるでしょう。

工業意匠学科出身のデザイナーの特質が浮かび上がるだろうなどとは決して言いません。しかし、在学中の後輩達は、先輩の作品を多数見ることで今までにない経験を味わうでしょう。現実の生き生きとしたデザイン界の様相が、もっと直接的な経路で学校内に入ってきます。後輩達にとっては、自分の現在位置を知り、そして焦点を定め得るよい機会となるでしょう。

すべてものごとは、連続性の中で語られてこそ意義深いと思われます。現在の日本のデザイン界は、まさに連続性の中で語られ得る落ち着きと力強い可能性を持ち始めていると思います。

私自身は画家です。しかし、自分の仕事がモダニズムに向かった時、デザインの世界に目をひらきました。また自分の仕事について分析をするようになり、他とのつながりを考えた時デザイン教育に思いを馳せましたし、また絵画における自身の方法論そのものが、あるデザイン分野では生きることも知りました。故にと言うか、だがしかしと言うかはわかりませんが、私は画家の目でデザインを見ています。私は美術とデザインを連動した世界として興味を持っています。

日本の美術界とデザイン界の現状を見ると、現在はデザイン界の方に幸せの風が吹いているようです。国際的な製品として通るものにデザインは生きていますから。私の言う幸せの風は、ものが売れて頬がゆるむが故の意ではなく、希望と自由を見出し得る地点にデザイン界は吹き寄せられたが故の意です。話の筋道としては前後の違いがあるかもしれませんが、希望と自由を見出し得るであろう規範を自分自身の中に見つめ得る客観的情勢が始まっていると私は思っています。また、そのような情勢は、個々の人に認識されることによってしか力を持ちえないとも思います。

卒業生の一人が私に話をしてくれたことがあります。「かつてあれ程思いをこめて見ていたブラウンの製品が私たちの目の前から消えてきた」と。これを聞いたのは確か70年代の終わり頃だったと思います。また、ある時、私が別の卒業生に、「日本の二輪車は、世界の二輪車の美学を引っ張っていると、ある西洋人が言ってましたよ」と話した時、彼の顔がどんなに輝いたことか。

私は日本のかたちの世界は、今後もっと広がり、なお深化し得ると思っています。何故ならば、日本のかたちのあり方は、西欧的な精神、あるいは大陸的な精神とは違った基盤を基にしているからです。かたちは空間性から生じます。そしてわれわれの空間観より来る空間性は、昔からそして今なお西欧のそれとは違います。ある時期お互いに影響があったにせよ。そして次の段階では、日本美術の装飾性の問題が浮かび上がるでしょう。西欧的な芸術精神では常にマイナーなものとして見られた装飾性が、実は独自のあるべくしてある存在なのだということに多くの人は、力を得るでしょう。その時、日本のデザイン活動における意匠という言葉が示し、内包していたものが何なのかを人々は再認識せざるを得ない。私はそのように思っています。

工業意匠学科主任、教授　重田良一
平成２年１月10日記